

# 下大豆塚1号・2号古墳

長野県佐久市長土呂下大豆塚1号・2号古墳調査報告書

昭和58年3月

佐久市教育委員会

## 例 言

- 1、本書は、昭和56年9月1日～昭和56年10月23日にわたって発掘調査された、長野県佐久市大字長土呂に所在する下大豆塚1号・2号古墳の調査報告書である。
- 2、本調査は、東信土地改良事務所の委託を受け、佐久市教育委員会が実施した。
- 3、本調査は、林幸彦を担当者とし、佐久考古学会有志を調査員、専修大学・東海大学学生を調査補助員として、地元長土呂・根々井・岩村田地区の方々の協力を得て実施した。
- 4、本書に挿入した遺構の実測図作成には、主に飯島・三石・堤・小山が、遺物の実測図作成には三石・佐々木・茂木があたり、遺構及び遺物のトレースは茂木が担当した。掲載した写真は、林・工藤・堤・小山が撮影した。
- 5、本書の編集は、小山・茂木が担当した。
- 6、本遺跡の資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

また、調査にあたり長野県教育委員会文化課関孝一、郷道哲章、臼田武正指導主事、神奈川県立埋蔵文化財センター宍戸信吾氏、神奈川県大和市教育委員会見崎巖、村沢正弘両氏には調査にあたって適切な御指導をいただき、東信土地改良事務所にはたいへん御協力いただいた。記して厚く御礼申し上げます。

# 本文目次

例言

本文目次

挿図目次

図版目次

I	発掘調査の経緯	
1	発掘調査に至る動機	1
2	調査の概要	1
3	調査日誌	2
4	調査の方法	2
II	塚原付近の地形・地質	3
III	歴史的環境	5
IV	遺構と遺物	
1	1号古墳	9
1)	墳丘	9
2)	内部構造	10
3)	遺物の出土状況	10
4)	出土遺物	14
2	2号古墳	16
1)	墳丘	16
2)	内部構造	16
3)	遺物の出土状況	17
4)	出土遺物	19
V	総括	22

## 挿 図 目 次

第1図	地形図	4	第8図	下大豆塚2号古墳地形図	16
第2図	古墳分布図	7	第9図	下大豆塚2号古墳実測図	17
第3図	下大豆塚1号古墳地形図	9	第10図	下大豆塚2号古墳石室展開図	18
第4図	下大豆塚1号古墳石室実測図	11	第11図	下大豆塚2号古墳石室内遺物 分布図	19
第5図	下大豆塚1号古墳石室展開図	13	第12図	下大豆塚2号古墳出土遺物実 測図[1]	20
第6図	下大豆塚1号古墳出土遺物実 測図[1]	15	第13図	下大豆塚2号古墳出土遺物実 測図[2]	20
第7図	下大豆塚1号古墳出土遺物実 測図[2]	15			

## 図 版 目 次

図版一	下大豆塚1号・2号古墳航空写真
図版二	1、1号古墳石室(南方より) 2、1号古墳石室(北方より) 3、1号古墳奥壁 4、1号古墳側壁 5、1号古墳棺床(河床礫)
図版三	1、1号古墳棺床 2、1号古墳しきり石、及び框石(北方から)
図版四	1、2号古墳(東方より) 2、2号古墳石室及び裏込め石(東方より) 3、2号 古墳裏込め石(北方より) 4、2号古墳墳丘確認トレンチ(東方より)
図版五	1、2号古墳棺床 2、2号古墳人骨出土状態 3、2号古墳鉄鏃出土状態 4、2 号古墳羨道部須恵器坏出土状態
図版六	1、2号古墳石室(東方より) 2、2号古墳石室(北方より)
図版七	1、2号古墳石室(西方より) 2、1号古墳出土土器
図版八	1、1号古墳出土土子・金環・玉類 2、2号古墳出土土器 3、2号古墳出土土器 4、 2号古墳出土鉄製品及び玉類 5、発掘参加者スナップ写真

# I 発掘調査の経緯

## 1 発掘調査に至る動機

佐久市大字長土呂において、東信土地改良事務所による佐久市北部県営圃場整備事業に際して、下大豆塚古墳群の破壊が余儀なくされたので、緊急に発掘調査し記録保存することとなった。

## 2 発掘調査の概要

- ・遺跡名 下大豆塚1号・2号古墳
- ・所在地 長野県佐久市大字長土呂 1953 番地他
- ・発掘期間 昭和56年9月1日～昭和56年10月23日（第1次）
- ・整理期間 昭和57年4月5日～昭和58年3月15日（第2次）
- ・調査団の構成（第1次、第2次）
  - 団 長 戸塚平一郎 佐久市教育委員会教育長
  - 調査担当 林 幸彦 佐久市教育委員会社会教育課
  - 調査員 井上行雄、大井今朝太、工藤かよ子、森泉定勝（佐久考古学会員）
  - 調査補助員 飯島篤、小山岳夫、堤 隆、三石宗一、茂木智里、佐々木宗昭（第2次）、掛川親一（第2次）
  - 協力者 大井恵美子、大井俊英、掛川祐次、須藤房子、沼田昌晴、橋詰武子、並木ことみ、丸山勝子
- ・事務局の組織（第1次、第2次）

（第1次）	（第2次）	
市川弥四郎	臼田幸作	佐久市教育委員会教育次長
臼田幸作	土屋四郎	〃 社会教育課長
井出喜平	井出喜平	〃 社会教育係長
堀内美喜男	堀内美喜男	〃 社会教育係
林 幸彦	林 幸彦	〃 社会教育係

### 3 発掘調査日誌

○昭和56年9月1日～9月14日

器材を搬入し、テント設営の後、調査地の桑木や草木の刈り取り除去を行ない、現況の写真撮影を行なった。

○9月15日～9月17日

現況地形図の作成作業を始める。併行してグリットを設定する。

○9月18日

期間が迫っているので、2班に分かれて1号・2号古墳同時にトレンチ確認を開始する。

○9月19日～10月9日

1号・2号古墳の玄室、前庭部、裏込めを同時に掘り進める。遺物分布図及び土層断面図、石室断面図の作成は、随時併行して行なう。10月2日からは、写真撮影及び掘り下げの順序も交差し、スケジュールに労苦があっ

た。

○10月12日～10月23日

古墳石室内の覆土を水洗選別する。その結果、白玉、小玉を検出した。

冬期間中は主に周辺の後期古墳群の実見調査を行なった（本古墳群の位置づけのため）。

○昭和58年1月

最終的な図面修正を行なう。

○同2月

土器の水洗い及び鉄器等の実測図作成ならびに遺物の写真撮影を行なう。

○同3月

原稿執筆を終了し、割付けの後、報告書刊行。

### 4 発掘調査の方法

本古墳を調査するにあたって、基本的な調査方法を次の様な確認事項をもって実施した。

1、墳丘の調査は、トレンチ（1m巾）によって封土の状態を確認した。

2、遺物の出土位置は、石室内以外は、トレンチの区画ごとに、石室ではすべてを記録した。また、石室内の覆土はすべて50cmメッシュによって水洗選別し、エラーした遺物の検出につとめた。

3、本古墳の記録は、墳丘は20cmコンタ、石室内は50cm方眼の小グリットを設定して行った。

## II 塚原付近の地形・地質

小海線岩村田を発して小諸に向うと、まず中佐都駅がある。この付近が佐久平北部の代表的な稲作地帯であり、近世に中佐都田圃として開拓された水田が一带に続いている。

ここは、浅間山麓の中腹、血の池から発する、濁川無機炭酸性の流域にあり、南西にわずかに傾斜し、水便にも恵まれ、かつ水質は炭酸を含む水酸化鉄の溶存量も多いために土地の酸性化も防ぎ、稲作にも適しているわけである。

この水田地帯には、大小 100 余個以上にも及ぶ、半球状、島状の残丘があり、松、から松、けやき、雑木等が繁って、陸の松島のような景観を展開している。この地方では、俗にこれ等を『塚』と呼んでいるが、塚原、平原、根々井塚原、狐塚などの部落名、字名、地名もそれに因って命名されたものらしい。

この塚を利用して、築いた古墳も数十基あり、今回発掘調査された下大豆塚 1 号・2 号古墳もその中の一基である。

この地域の地質は（第 6 図）基盤である洪積層、湯川層の上部に、黒斑山（浅間山の第 1 外輪山）のカルデラ爆発によって、噴出した多量の火山砂や、溶岩片、既存の岩片が一時に流下した、塚原岩屑流（泥流ともいう）が覆っており、その末端部にあたっている。厚さ 3～15 m、東側は湯川の線、西側は近津付近、南縁はほぼ千曲川に及ぶ不等辺三角形の地域に分布し、北上部は、小海線で、その後の新しい浅間火山の噴出物追分火山灰流に覆われている。

以上が塚原付近の地質状況で、今回調査をみた、下大豆塚 1 号・2 号古墳を構成していた岩石は、羨道玄室共に、大塊の大部分は、塚原泥流の、多孔質集塊岩 (Ag) が利用されており、一部には塚原泥流中の本質溶岩である、輝石安山岩 (Ad) が僅かに使用されていたが、これは比較的小型のもので、2 号古墳においては羨道部の側壁や框石などに多用される傾向が看取された。

（白倉盛男）



- 火山泥流    ▨ 沖積層
- 火山岩     ▩ 洪積層
- ▨ 旧火山岩    ■ 小諸層群

第1図 佐久平地質図 (1:100,000)  
 一原図作製  
 白倉承認番号昭50第56号



### Ⅲ 歴史的環境

佐久市内の遺跡は現在 300 箇所を超える。このうち、弥生～平安時代の遺跡は千曲川、片貝川、及び湯川流域の平坦地に濃密な分布を示す。今回調査された、下大豆塚 1 号・2 号古墳は、市内北部の旧浅間町を中心とする地域の特有な田切地形の台地先端部の平地に位置している。この地域には湯川の他に、濁川など数条の河川が西南に向けて流下し、小田井から長土呂近辺の国道 141 号線以南の小海線及び中仙道沿線に至っては、河川と台地の比高は減少し、微高地が形成されている。これらの台地、微高地上には多くの遺跡が分布し、下大豆塚 1 号・2 号古墳もその例外ではない。

第 2 図から窺えるように、この地域は弥生～平安時代の遺跡がその大部分を占め、濃密な分布を示す。まず、弥生時代の遺跡を概観すると、中期の遺跡は台地・微高地の先端部に位置する傾向があり、南近津遺跡群、鷺林遺跡、長土呂遺跡群上飼袋、下飼袋遺跡等で栗林式土器が豊富に採集されている。また、湯川に面した北西久保遺跡<sup>(1)</sup>でも栗林Ⅱ式を主体とする住居址群が発掘調査によって検出されている。後期の遺跡は、濁川の流路を馬蹄状に取り囲んで位置し、一本柳、鳴沢、西一里塚、岩村田、琵琶坂、長土呂、周防畑、南近津等の遺跡が分布する。西一里塚遺跡では環濠と 11 軒の住居址、一本柳遺跡では 7 軒の住居址、清水田遺跡では 9 軒の住居址、下小平遺跡<sup>(2)</sup>では 5 軒の住居址と方形周溝墓、周防畑 B 遺跡<sup>(3)</sup>では住居址 23 軒と円形周溝墓 2 基、土壙墓 17 基<sup>(4)</sup>が発掘調査によって検出されている。

古墳時代前期・中期の遺跡は、北西久保遺跡<sup>(6)</sup>で住居址 20 軒、下小平遺跡<sup>(7)</sup>で前期の方形周溝墓が発出されているが、相対的に遺跡数は希少である。後期になると上の城遺跡<sup>(8)</sup>で 15 軒の住居址、東一本柳遺跡<sup>(8)</sup>で 5 軒の住居址、清水田遺跡<sup>(8)</sup>で 3 軒の住居址、北近津遺跡<sup>(8)</sup>で 4 軒の住居址、西近津遺跡<sup>(8)</sup>で 3 軒の住居址が発掘調査されている。これら古墳時代の遺跡も弥生時代と同様に濁川流路(遺跡無分布地帯)を取り囲むように分布し、平安時代の住居址群(上の城・北西久保・一本柳・周防畑 A・B 遺跡などで発掘調査されている)の分布もその例外ではない。下大豆塚古墳を含めた後期古墳群は、馬蹄形状に分布する集落群よりもやや内側に存在する傾向にある。

塚原古墳群には下大豆塚 1 号・2 号古墳の他に、同 3・4 号、藤塚 1・2・3 号、宮ノ塚、砂畑、東池下 1 号・2 号・家地頭、鷺林古墳群などがあり、東池下 1 号古墳から直刀 2 本、家地頭 1 号古墳から円筒埴輪、玉類、須恵器等、鷺林 2 号古墳からは人骨、直刀、馬具、土師器等<sup>(9)</sup>が発掘調査によって検出されている。遺跡無分布地帯を狭んで塚原古墳群の東南に位置する岩村田・根々井地区には、国蔵山、樋田、喜平治山、小塚、東原塚、姫宮塚、東一本柳古墳<sup>(10)</sup>や、北西久保

古墳群などが存在する。このうち東一本柳古墳からは、発掘調査によって鉄鏃、刀子、馬具、金環、玉類、土師器、須恵器等多数の遺物が検出されている。

これらの古墳群は大方が7世紀～8世紀初頭の築造年代が与えられているが、正確に石室の規模・形態等を明らかにする発掘調査の成果が少なく、また実年代を積極的に肯定する遺物も乏しいため、その位置づけは、今後の調査に待つところが大きい。 (小山岳夫)

註

- (1) 佐久市教育委員会 1980 『北西久保』
- (2) 臼田武正 1974 『佐久市岩村田西一里塚遺跡発掘調査概報』
- (3) 竹内 恒・土屋長久 1972 「佐久市岩村田東一本柳古墳緊急発掘調査報告」(『長野県考古学会誌 13』)
- (4) 佐久市教育委員会 1981 『下小平遺跡』
- (5) 佐久市教育委員会 1981 『周防畑B遺跡』
- (6) 前掲註 (1)
- (7) 前掲註 (4)
- (8) 佐久市教育委員会 1972 『岩村田一本柳—佐久市岩村田一本柳遺跡緊急発掘調査概報』
- (9) 佐久市教育委員会 1976 『家地頭第1号古墳発掘調査報告書』
- (10) 前掲註 (3)

No.	古墳名	備考	No.	古墳名	備考
1	下大豆塚1号古墳		9	鷺林3号古墳	
2	下大豆塚2号古墳		10	鷺林4号古墳	
3	東池下1号古墳	直刀1	11	鷺林5号古墳	
4	東池下2号古墳		12	家地頭1号古墳	円筒埴輪、玉類、鉄製品、須恵器
5	東池下3号古墳	玉類出土	13	藤塚1号古墳	
6	大豆塚古墳		14	藤塚2号古墳	
7	鷺林1号古墳		15	藤塚3号古墳	
8	鷺林2号古墳	人骨、直刀、馬具、土師器			

小 諸 市



第2図 古墳分布図 (1 : 5000)

## IV 遺構と遺物

### I 1号古墳

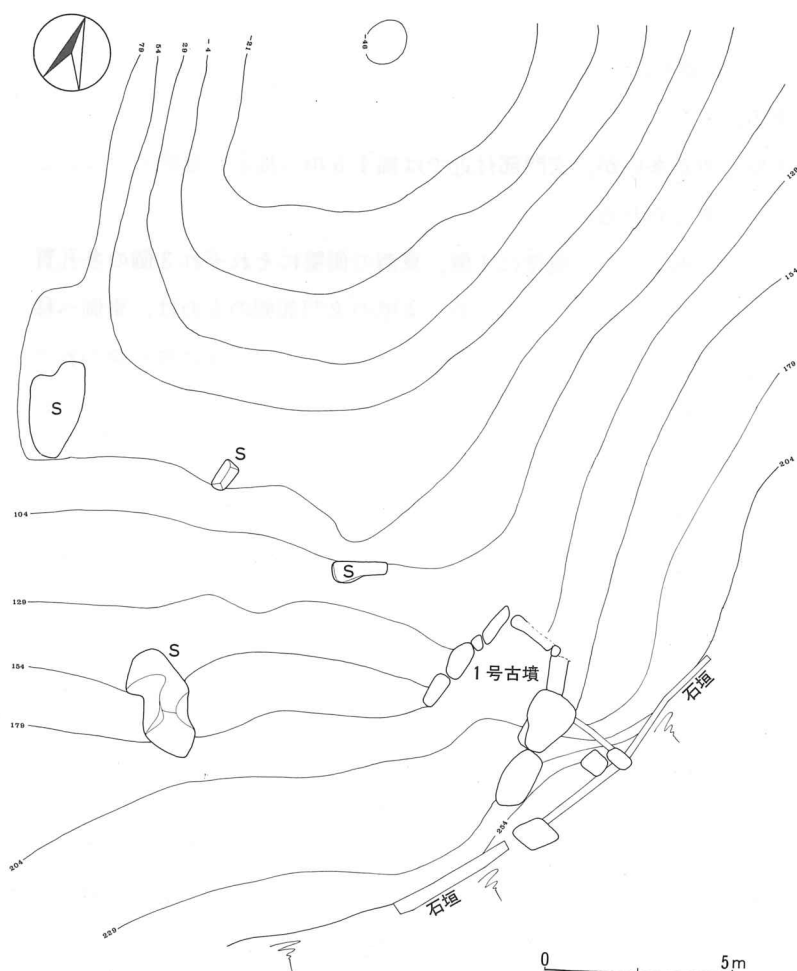
#### 1) 墳丘 (第3図)

下大豆塚1号古墳は、浅間塚原泥流の残丘下部東端の緩傾斜地に構築され、2号墳とは西南に向って70m離れた場所に位置している。残丘頂部との比高差はおよそ3mを測る。

墳丘は往時の形態を全く止めず、奥壁から西壁の一部にかけて墳丘を形成したした黒褐色土と小礫が若干確認されたのみで、既に石室主体部のほとんどが露出し、天井石は何処かに運び去ら

れたり、東壁外へ陥落した状態であった。従って墳丘の原形を推定し、復元することは、ほぼ不可能と言える。また、周辺の地形図(第3図)を見ると明らかに、1号古墳の西側には大形の多孔質集塊石(Ag)が4個散在するが、浅間塚原泥流の残丘には同種類の石が必ず含まれる特徴があり、当古墳の構築材とは直接関わりをもたないと考えた方が妥当である。

以上、当古墳は発掘当初から墳丘ばかりか、主体部内部も棺床部においてミョウガの



第3図 下大豆塚1号古墳地形図 (1:200)

栽培痕が認められるほど、著しい破壊をうけていることが看取された。

## 2) 内部構造(第4・5図、図版二・三)

石室の内部構造は横穴式石室で南側に開口するが、原形を留めるのは、玄室と羨道部の一部のみで、全容を把握することはできない。前庭部が位置したと思われる羨道部の前部も、破壊が著しく、焼石を主体とする礫群が認められ、中からは棺床に使用された小礫(角のとれた平たい河床礫である)や土器片、骨片などが散在していた。

石室の形状は羨道部の壁面を形成した玄武岩が東側に1個残存するのみであるため、明らかでない。しかし、ほぼ原位置を止める框石の位置や、羨道の床面を形成する小礫の空白箇所などから考えると、東側の壁から1m間隔を置いた箇所に、西側の羨道部側壁が存在した可能性が強い。したがって、石室は羨道部の位置が若干西側に寄った両袖をもつ、はご板状を呈すると考えるのが妥当であろう。奥壁から残存する羨道部までの現存長は4.75m、玄室部長3.82m、奥壁幅2.48m、玄門部幅2.75m(推定)を測り、石室プランの長軸方向はN-20°-Eを示す。これらは高麗尺の尺度に近い数値である。

羨道部は先述したように不明な点が多いが、玄門部付近では幅1.6m(推定)を測り、これとほぼ同値の幅で形成されていたと考えられる。

玄室は、中位に最大径をもつ長方形を呈し、奥壁に1個、東西の側壁にそれぞれ3個の多孔質集塊石(Ag)を配して大方が形造られている。このうち、東壁の玄門部側のものは、東側へ移動され、また、天井石は東壁外へ陥落したものが1個確認されたのみで、他は既に取り除かれていた。壁面を形成した石の規模は、幅80~157cm、高さ86~130cm、厚さ52~76cm、天井石は長さ165cm、厚さ90cmを測る。

石室の床面には若干、黒褐色土の堆積がみられ、北東部は完全に破壊されていた。また、当墳の床面は、面を同一レベルにするため、残丘の緩傾斜地上に埋め没された暗褐色土の上に構築されている。

玄室部の床面には径10~20cmの平たい河床礫が残存し、往時はこれを敷きつめて棺床面を構築していたと考えられる。羨道部の床面には若干大型の円礫が敷きつめられ、玄室部の底面よりも約10cmレベルを低下させている。また、玄室部の棺床面は奥壁から2cmの位置に3個の輝石安山岩を横一列、直線状に配して区切られており、前室と後室をもつ特徴を有する。

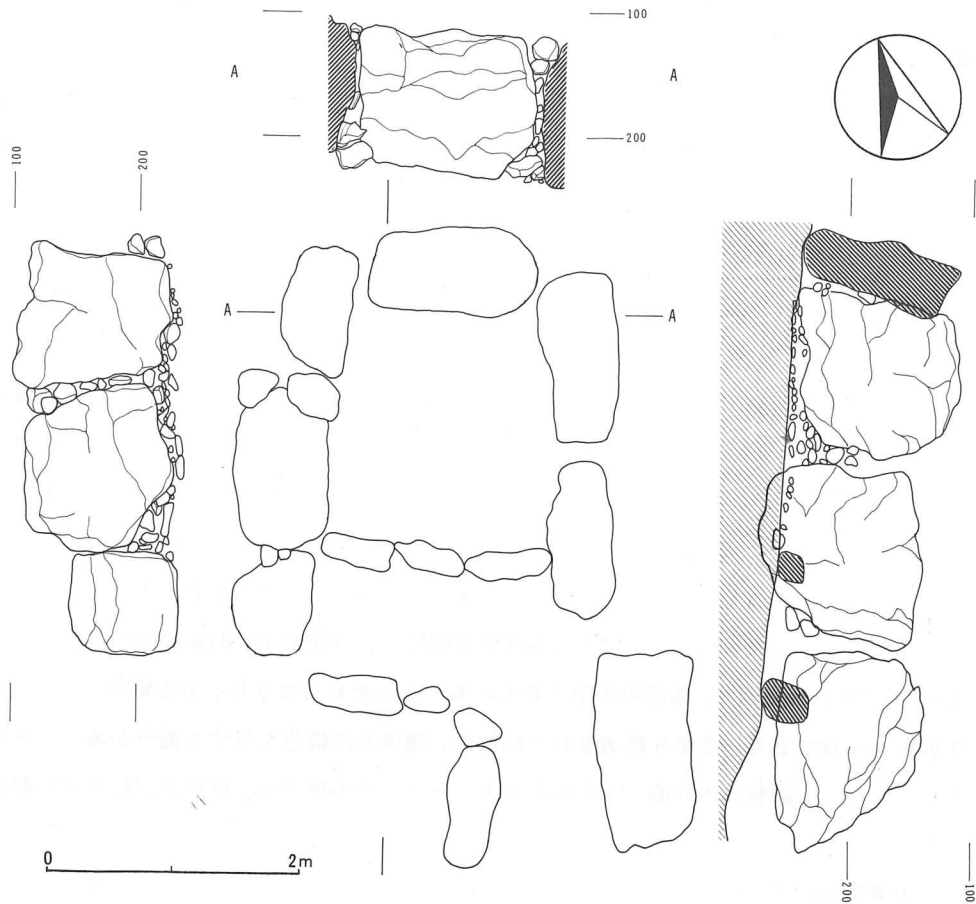
## 3) 遺物の出土状況

既に数次にわたる破壊・盗掘をうけているためか遺物の出土量は少なく、また、埋葬当時の位置を保つ遺物は極僅かであったと考えられる。また、遺物の大半は、玄室部及び前庭部が存した礫群に集中して分布する。

玄室内からは金環2点、刀子1点、玉類4点が検出されている。金環は、中央のしきり石の下



第4图 下大豆塚1号古墳石室実測图(1:60)



第5図 下大豆塚1号古墳石室展開図（1：60）

（第7図2）、攪乱層（第7図5）から出土し、玉類（第7図6、7、8、9）は後室から2個、棺床上、玄室覆土内からそれぞれ1個ずつ検出され、全体的に極めて散漫な分布状況を示している。骨片等は検出されなかった。

前庭部の礫群からは、土器片（須恵器、土師器）、金環、骨片等が検出されている。玄室部と同様に散在的であるが、羨道部から南東へ2.5m～3m離れた箇所にも土器片及び骨片が集中する傾向が看取される。この集中箇所の付近には、棺床に用いられた河床礫も散見できることから、これらの土器片、骨片が主体部の玄室と深い関わりをもっていたと推察できる。但し、土器片に関しては、平安時代に比定されるものが主体を占め、当古墳の築造年代とは隔たりが大きいため、追葬あるいは後代の祭祀等に関連する遺物かと考えるのが妥当であろう。

#### 4) 出土遺物

##### 土器 (第6図、図版七の2)

本古墳からは、須恵器片19点、土師器片5点、計24点が出土している。このうち、接合復元によって図化できたのは、須恵器横瓶1点(1)・小型甕1点(2)・坏1点(3)、土師器坏2点(4・5)の計5点であり、他は拓影図を用いて説明を加える。

1は、須恵器横瓶の胴部中位の破片で、最大径は推定で27.4cmを測る大形品である。胎土は厚手で、精選され、暗灰褐色を呈す。焼成は良好で、外面上部には自然釉が付着する。調整は内外面とも縦位のヘラナデが施されている。

2は、須恵器小型甕で、口縁部～胴部上位にかけて約 $\frac{1}{2}$ 欠損する。口径で6.8cm、胴部最大径9.2cm、器高5.9cmを測る。胴部はほぼ中位の外稜に最大径をもつ、そろばん玉状を呈し、強く短く外反して口縁部に至る。口縁端部は肥厚し、2段の段を有する。胎土はおおむね暗灰褐色を呈し、径4～5mmの砂粒を少量含有し、焼成は良好である。調整は内外面ともロクロヨコナデが施されるが、外稜を境として上下別個に成形された後、接合された痕跡が顕著である。

3は、須恵器坏の口縁～底部にかけて $\frac{1}{3}$ 残存する破片で、口径で12.8cm(推定)、底径4.2cm(推定)、器高4.0cmを測り、体部の中位で若干のふくらみをもって立ち上がる特徴がある。胎土は、小砂粒を多量に含み、あまり精選されていない。焼成も淡橙色を呈する箇所が多く、あまり良好とは言えない。調整は内外面とも右回転ロクロヨコナデが施され、底部は回転糸切り離しされている。

4は、土師器甕の底部破片で厚手で丸味を帯びている。小砂粒を含むが胎土は精選され、焼成も良好である。調整は内外面ともにヘラケズリが施されている。

5は、土師器坏で、口縁～胴部を $\frac{1}{2}$ 欠損する。口径で12.2cm、底径5.2cm、器高4.0cmを測り、胴部から口縁部にかけて若干の丸味をもって立ち上がる。胎土は精選され、焼成も良好である。調整は内外面とも右回転のロクロヨコナデが施され、その後内面は黒色研磨されている。底部は回転糸切り離しが施されている。

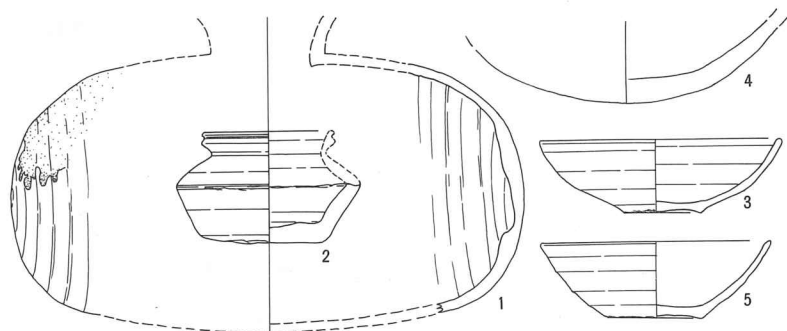
その他、須恵器では、口縁部に断面三角形の端部を有し、櫛描波状文が施される甕の口縁部破片(1・2)や外面に敲き目、内面に同心円叩きが施される厚手の甕の胴部破片(2・3・4・6)、外面に細いヘラ状工具で不規則な沈線を施し、内面に同心円叩きやヨコナデを施す甕の胴部破片(7・8)がある。

##### 鉄器 (第7図1、図版八の1)

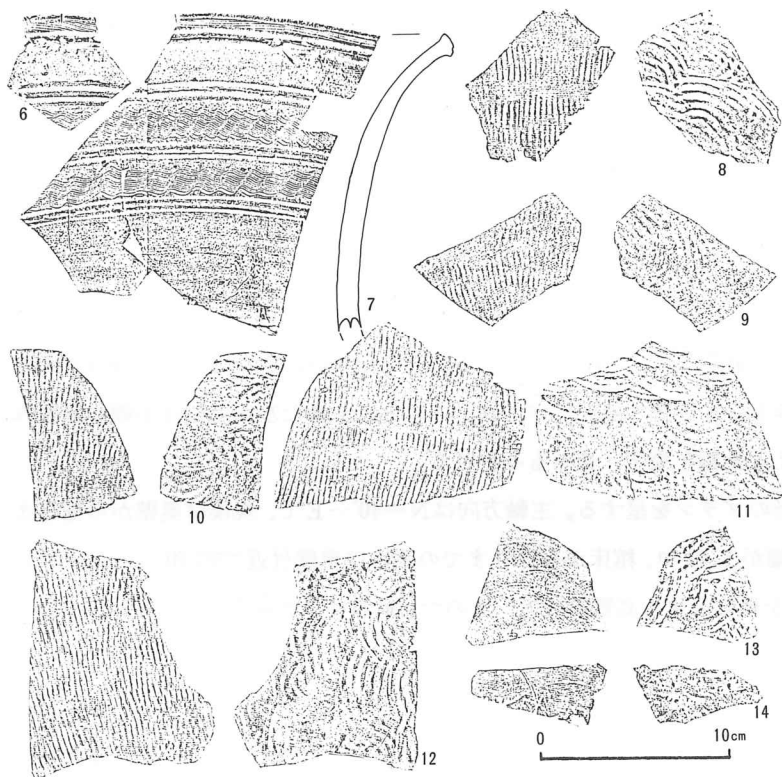
鉄製品は刀子1点のみが出土している。遺存状態は比較的良好で全長11cm、刀部9cm、身幅1cm、重ねが0.5cmを測る。断面形は刃部が鋭角的な二等辺三角形、茎部がほぼ方形を呈する。

##### 金環 (第7図2・3・4・5、図版八の1)





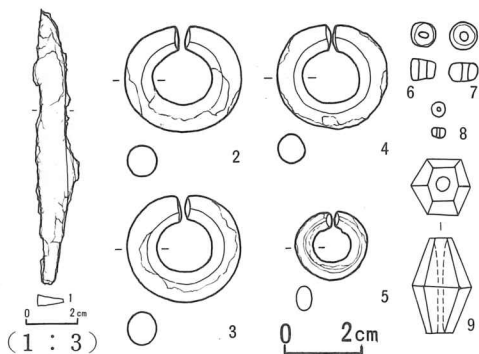
総数で4点出土している。1～3は径2.8～2.9cmのほぼ同一規模の環状を呈し、断面はほぼ円形である。4は径1.9cmの環状で断面は楕円形を呈する。いずれも緑錆の付着が著しい。



### 玉類(第7図5～8)

小玉3点、切子玉1点が出土している。5・7は濃紺色のガラス製で、5は白玉と呼称されるもので径7.7mm、高さ6mm、7は小玉と呼称される小型のもので径4mm、高さ2.5mmを測る。6は滑石製の白玉で、径8mm、高さ6mmを測る。切子玉は水晶製で長さ2.5cm、厚さ1.45cmを測る。

第6図 下大豆塚1号古墳出土遺物実測図〔1〕(1:4)



### 骨片

骨片は形状の明らかなものが少なく、出土位置が玄室内ではないため人骨と断定することはできない。現在、鑑定依頼中である。

以上、本古墳の出土遺物は、須恵器及び土師器が平安時代に比定されるものが主体を占め、玄室の他の遺物も極めて貧弱であることから、築造年代を決

第7図 下大豆塚1号古墳出土遺物〔2〕 定する根拠にはなり難いものと考えられる。従って、

これらの遺物は、先述した出土状況からみて追葬、後代の祭祀等の性格も内包することも想起できるが、これについても尚、慎重でありたい。(小山岳夫)

## 2 2号古墳

### 1) 墳丘(第8図、図版四の1、4)

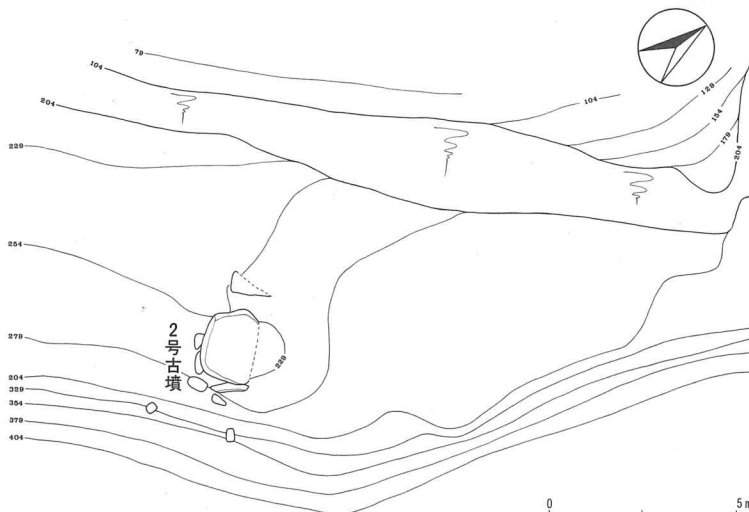
墳丘は黒斑山の爆発によって発生した塚原岩屑流(泥流)による火山性の残丘のすそに構築されている。いわゆる「流れ山」と呼称される火山性の残丘の利用は、塚原古墳群の最も一般的なあり方である。墳丘の一部はすでに崩壊しており、石室の一部が露出しているような状態であったが、構築当初は径5m前後の小円墳であったと察せられる。古墳の前庭部はすでに水田により湮滅し、玄室は南東に向って開口、後部の天井石は玄室内に崩落していた。

### 2) 内部構造(第9・10図、図版四の2・3、五の1、六・七の1)

前庭部及び羨門は、すでに失なわれ、羨道部の両壁及び玄室のみが残されていた。石室の石材には、多孔質集塊岩(Ag)と輝石安山岩(Ad)が利用されている。扁平な多孔質集塊石の袖石を内側に突出させて玄門とし、框石には方柱状の輝石安山岩を横一列に2個配置している。玄室内部では、奥壁に輝石安山岩の大石1枚が、両側壁にはそれぞれ2枚の石材が配されている。天井は、玄室の半ば以上を覆う多孔質集塊岩(Ag)の大石と、既に玄室内に崩落している輝石安山岩の2石による。石室の主体をなす各壁の隙間には小礫が詰められ、また左側壁には小礫の裏積みが顕著である。奥壁を支える役割を果たす、補石もみられる。

石室はかなり整った矩形のプランを呈する。主軸方向はN-40°-Eで、規模は奥壁から框石までの長軸が2.45m、奥壁幅が1.40m、棺床から天井までの高さは奥壁付近で約70cmとなっている。これらの数値は35cmを単位とする高麗尺に近いもので、換算すると長さ7尺、幅4尺、高さ

2尺となる。棺床には掘り方に30cm前後の埋土がなされた後、握り拳の半分程度の扁平な河床礫が敷きつめられている。ただし、玄室の後部の棺床は天井石の崩落等によって攪乱を受けた状態にあった。

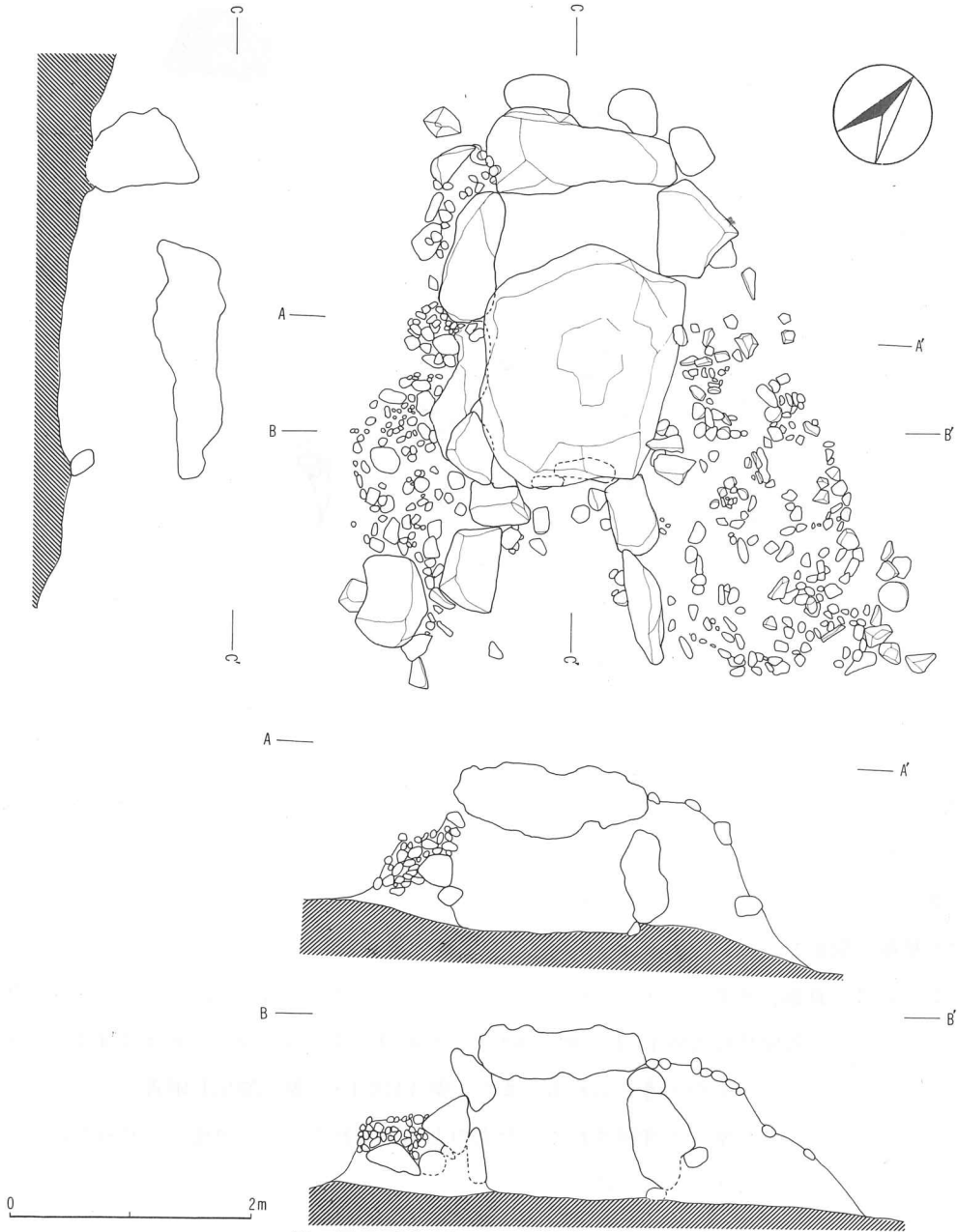


第8図 下大豆塚2号古墳地形図(1:200)

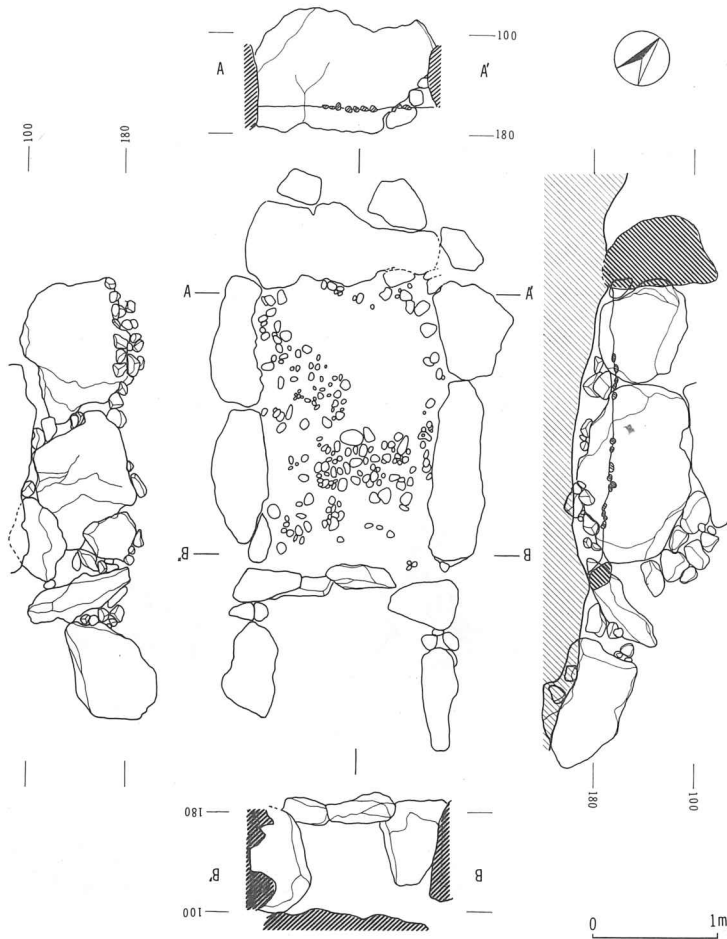
3) 遺物の出土状況 (第 11 図、図版五の 2 ~ 4)

遺物は、封土中、羨門、玄室内から検出されているが、総じて量は少ない。また、原位置を留めると考えられる遺物も僅かである。

封土中からは、黒耀石の石鏃 1 点、須恵器の破片及び長頸瓶の頸部片 1 点が検出されている。



第 9 図 下大豆塚 2 号古墳実測図 (1 : 60)

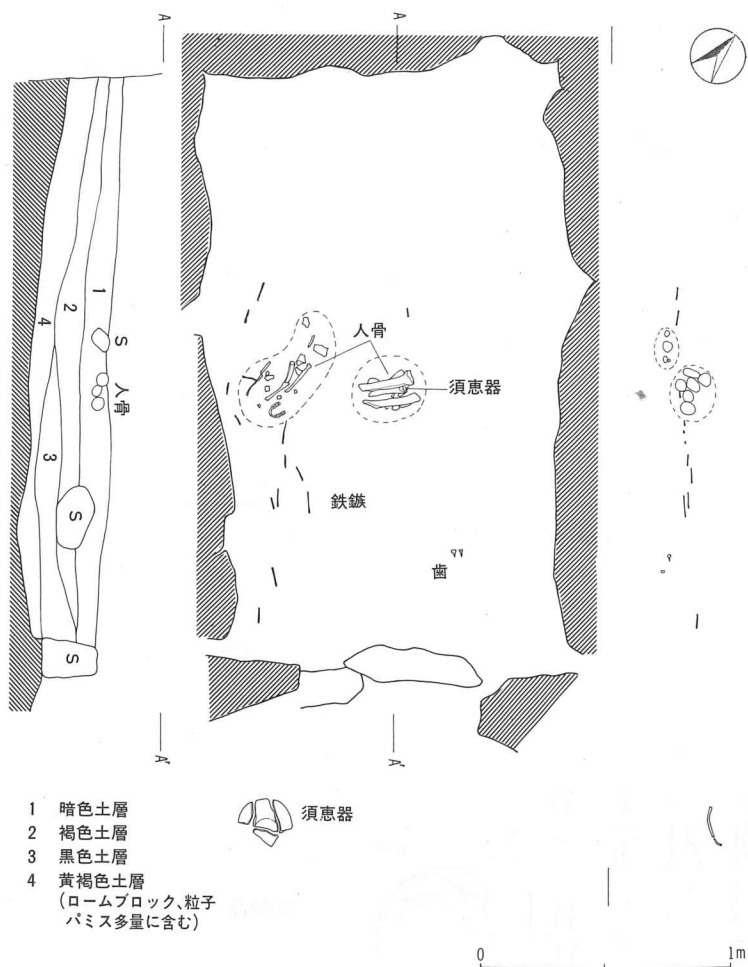


第10図 下大豆塚2号古墳石室展開図(1:60)

羨門の前方からは、須恵器杯(第11図)が伏せ置かれた状態で検出された。出土状況からみて何らかのかたちで本墳に関与してくる資料と思われる、本墳の時間的な問題を考えるうえで貴重な資料である。ただし、これが当初の埋葬時のものか、後代の追葬・祭祀の際のものであるかを理由付ける積極的根拠を欠く。

玄室内からは、鉄鏃、馬具、白玉と人骨が検出されている。鉄鏃は欠損等により、正確な個体数は不明であるが、部分品も含め15本が検出された。そのほとんどは玄室の左前半に集中し、大半は原位置を留めていないものと考えられる。また、第13図1・2等、酸化し附着しているような状態からみて、当初は一括して埋納されていたものと考えられよう。この他、馬具は左前半、白玉は後半の棺床上から検出されている。

人骨は石室のほぼ中央より検出された。このうち、より側壁に近いまとまりで検出された下顎では、歯弓上にはほぼ完全に近いかたちの歯ならびが看取できた。中央の一群(第11図)は遺存状



第11図 下大豆塚2号古墳石室内遺物分布図(1:30)

態が良好な人骨で棺床を繰り抜くかたちで一括して埋納されたものとして把握できた。

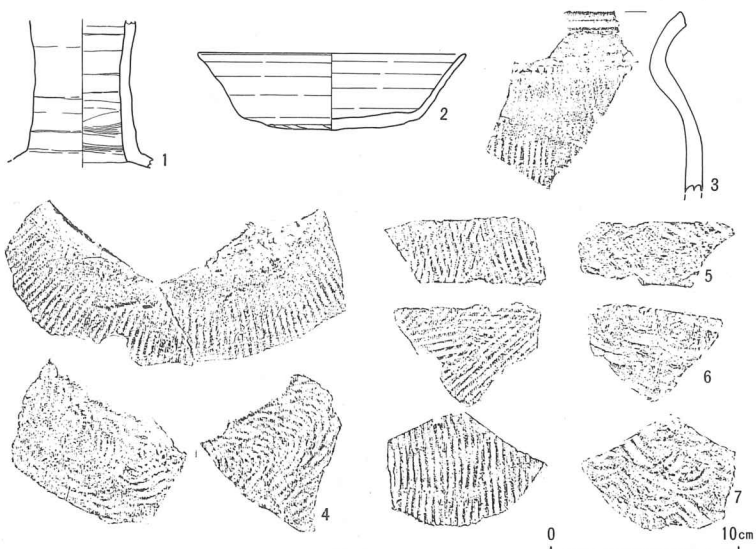
#### 4) 出土遺物

土器(第12図1~7、図版八の3)

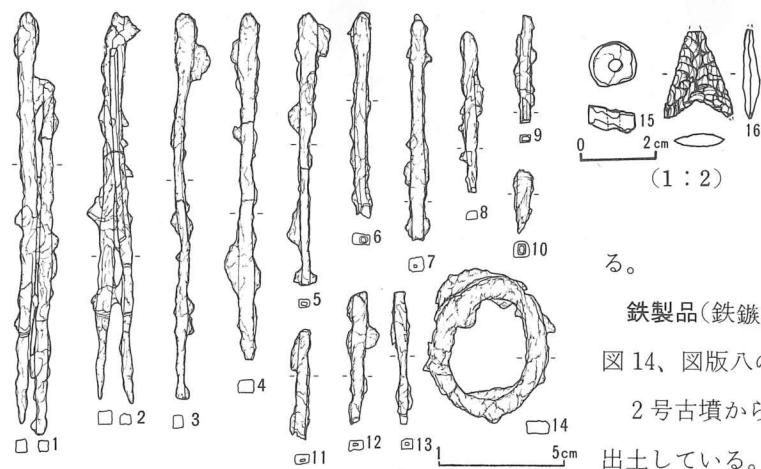
本古墳からは須恵器片7点が出土している。

1は須恵器長頸瓶の頸部破片で、最大径5.8cmを測る。胎土は精選され、焼成も良好である。内外面ともヨコナデが施されている。

2は須恵器杯でほぼ完形である。口径14.2cm、底径9.2cm、器高4.1cmを測り、体部から口縁部にかけて若干外反気味に立ち上がる。胎土は灰褐色を呈し、精選され、焼成も良好である。調整は内外面とも右方向のロクロヨコナデが施され、底部は切り離しの後、全面にヘラケズリが施されている。



第12図 下大豆塚2号古墳出土遺物実測図〔1〕(1:4)



第13図 下大豆塚2号古墳出土遺物実測図〔2〕(1:3)

どもあり正確な個体数は不明である。総べてが有茎鎌であり、また鎌身の判別できるものすべてが尖根鎌である。尖根鎌は総数で9点あり、篋被鑿矢式(第14図1・2・3・4・5・6・7)と篋被片刃矢式(8)に大別される(但し、鎌身先端の形態は不明確なものが多く、詳細な分類は避けた)。篋被鑿矢式の断面形は鎌身でかまぼこ形の片丸、篋代では方形を呈するものが主体を占め、明瞭な関を有するもの(3)もみられる。篋被片刃矢式の断面形は篋被鑿矢式とほぼ同様である。

9~13は鎌身を欠いており、全体の形状は不明である。断面形はおおむね方形を呈し、すべてが中央部に丸い孔を有する。中央部の孔は5・6にもみられる。

3~7は、須恵器甕の口縁部・頸部・胴部の破片である。3は口縁部端に段を有し、口縁部から胴部にかけて強く外反する。胎土は他の破片とは異なり淡灰褐色を呈し、焼成は良好である。調整は胴部外面に叩き目を施した後、ヨコナデを加える他は、単にヨコナデのみが施されている。

4~7は、頸部~胴部にかけての破片で、胎土は暗灰褐色を呈し、外面に叩き目、内面には円弧叩きが施される。

る。

鉄製品(鉄鎌第13図1~13、馬具第13図14、図版八の4)

2号古墳からは、鉄鎌及び馬具の轡が出土している。

鉄鎌は13例検出されている。欠損品な

馬具は轡の一部である鏡板のみが検出されている。構材には断面が長方形をなす鉄棒が用いられ、径 5.5 cm 程度のやや楕円に近い環となっている。

#### 玉類（第 14 図 1、図版八の 4）

玉類の検出は、滑石製の白玉（第 14 図 1） 1 点のみである。

#### 人骨

人骨は現在鑑定依頼中であるが、出土した歯の本数より考えると少なくとも 2 遺体以上の埋葬が想定できる。

以上、本墳出土の遺物は、羨道部にみられた須恵器坏（第 12 図 2）が 8 世紀初頭、玄室内の鉄鏃が 7 世紀代にみられるもので、個々の遺物に若干年代の隔たりが認められる。

最後に、本墳に於ける追葬の可能性について述べておきたい。玄室内中央部より検出された人骨は、棺床を繰り抜くかたちで一括して埋葬されていたことは前述した。このような埋葬状態は追葬を暗示させる。ただし、棺床面より上層は天井石の崩落、盗掘等による攪乱が激しく、市内東一本柳古墳でみられるような追葬時の第二棺床等の検出が不可能であった。また遺物の検出量が総じて少ないなかであって、年代を示すような遺物が皆無に等しく、まして年代差を示すような遺物の共存を把握できず、追葬を実証する根拠は極めて乏しい。唯一、玄門付近より出土した奈良時代の坏が、本墳の関与した時間をつかむ糸口となり得よう。以上のように追葬についてはこれを証明する手がかりが僅少であり、この点においても慎重でありたい。 （堤 隆）

## V 総 括

従来、佐久平の450基にも及ぶ古墳群はそのほとんどが7～8世紀と漠然と位置づけられ、その中でも塚原古墳群は古墳時代最終末とされてきた。ただし、これは土屋長久氏も指適されるように、<sup>(1)</sup>群構成にも当然年代幅があり、一度に構築されたものではないようである。従って、下大豆塚1号・2号古墳に対しても一応の位置づけを行っておく必要がある。下大豆塚1号・2号古墳はいずれも丘陵の端部の低地に位置する点、石室プランが高麗尺の尺度に近い数値を示し、比較的整った矩形を呈する点、副葬品の量が比較的希薄であったと考えられる点など共通する要素が多い。1号古墳においては、築造年代を積極的に肯定する副葬品及び周辺出土遺物に欠けるが、2号古墳では、7世紀代とみられる尖根篋被鏃矢式や尖根篋被片刃矢式の鉄鏃が出土しており、築造年代決定の一つの根拠となり得る。<sup>(2) (3)</sup>更に先述した矩形を呈する整ったプラン、高麗尺を単位とする石室の規模などを考え合せると、2号古墳の築造年代は、7世紀中葉～後葉を想定することができる。1号古墳に関しては遺物が欠如するため、年代決定は更に慎重な態度でのぞまねばならないが、石室の形状・規模から考えると2号古墳とほぼ近接した築造年代が与えられるだろう。

以上、簡単ではあるが、比較資料の乏しい現状では築造年代の限定は避け、今後の調査例の増加を待って当古墳の正確な位置づけを行いたい。

最後に下大豆塚1号・2号古墳の調査結果の所見から、今後の研究課題を述べておきたい。当古墳は2基とも丘陵端部の低地上に位置し、遺物は往時から比較的少なかったことが推察された。これに対し、1975年に調査された家地頭1号古墳などは残丘の頂部に石室を設け、低地の古墳よりも労力を要して構築されたことが伺われる。また、遺物も鉄鏃、馬具、玉類などが多量にあるほか、埴輪も出土しており下大豆塚1号・2号古墳が著しい盗掘・破壊を受けていることを勘案しても家地頭1号古墳の遺物は豊富なものであったと推察できる。僅かな調査例からの考察であるため結論は後の調査、研究成果に譲らねばならないが、古墳の残丘における位置によって被葬者の格差、あるいは年代差が伺えるか否かは興味深い研究対象と言えるのではなからうか。

(堤 隆、小山岳夫、林 幸彦)

註

- (1) 土屋長久 1970 「佐久平の後期古墳群について」(『信濃 22-5』)
- (2) 宍戸信吾氏の御教示による。
- (3) 後藤守一 1937 「上古時代鉄鏃の年代研究」(『人類学雑誌 54-4』)

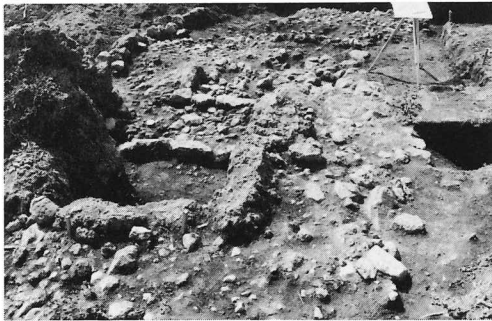




下大豆塚1・2号古墳航空写真



1. 下大豆塚1号古墳石室（南方より）



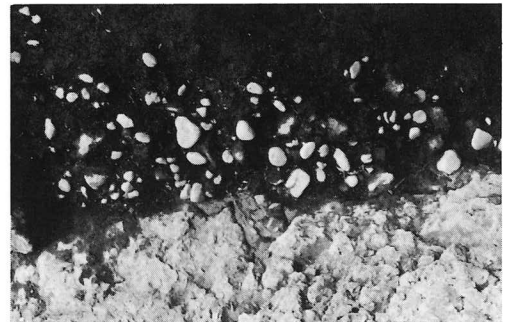
2. 1号古墳石室（北方より）



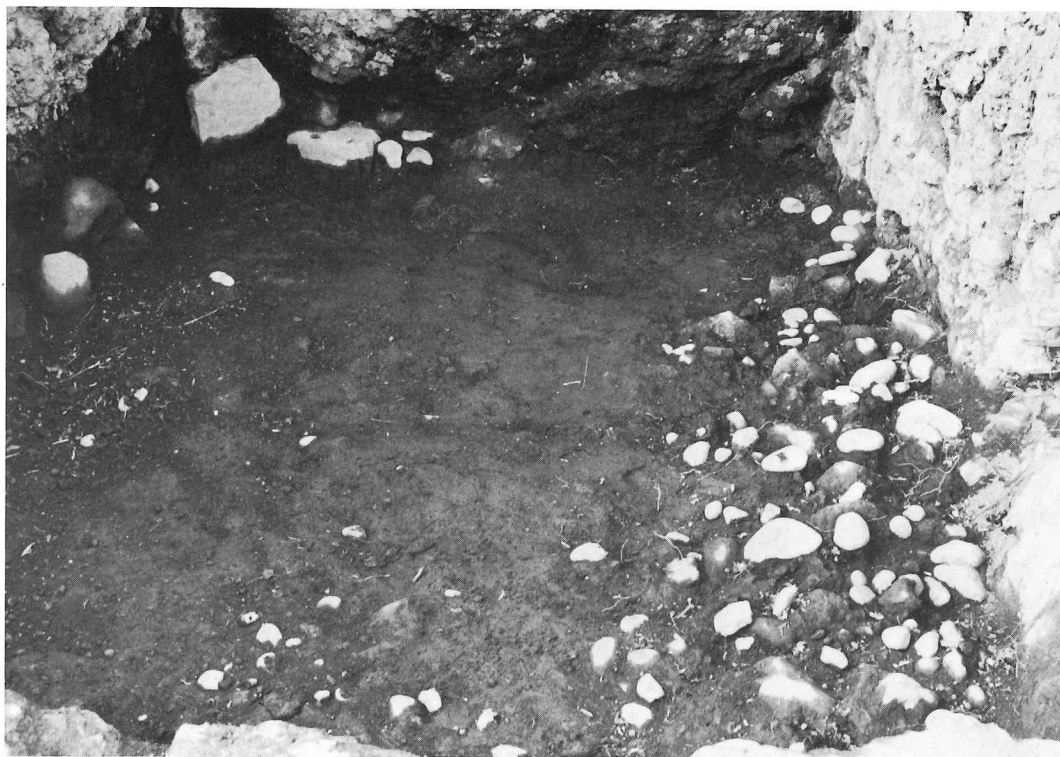
3. 1号古墳奥壁



4. 1号古墳側壁



5. 1号古墳棺床（河床礫）



1. 1号古墳棺床



2. 1号古墳しきり石及び框石（北方から）



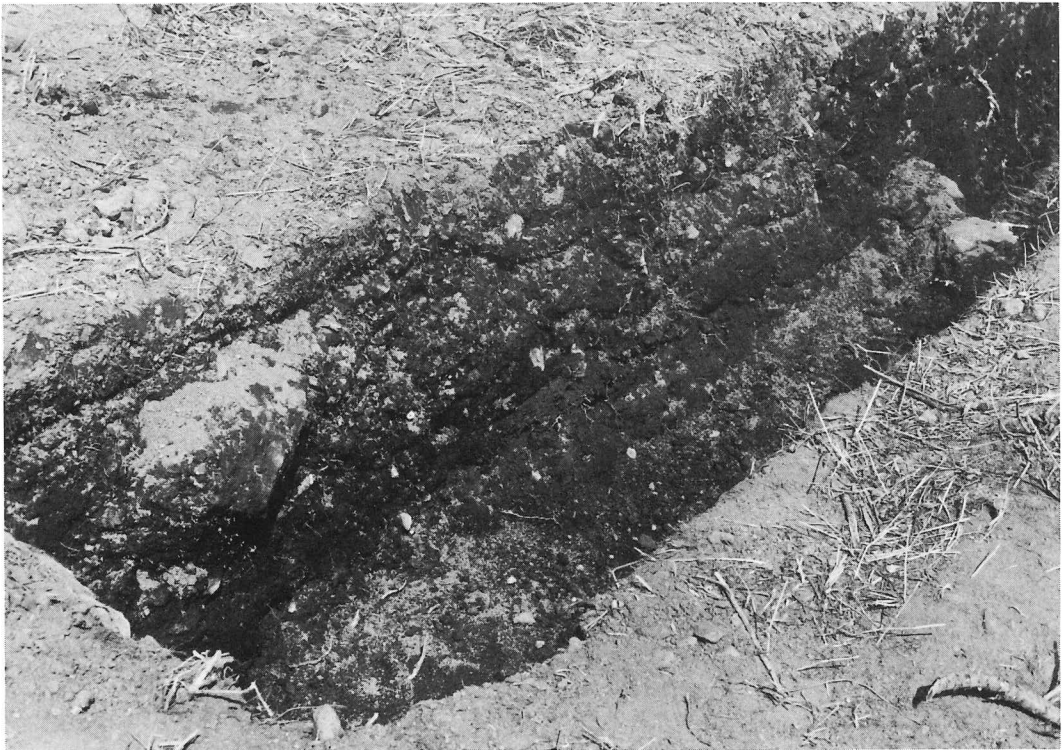
1. 2号古墳（東方より）



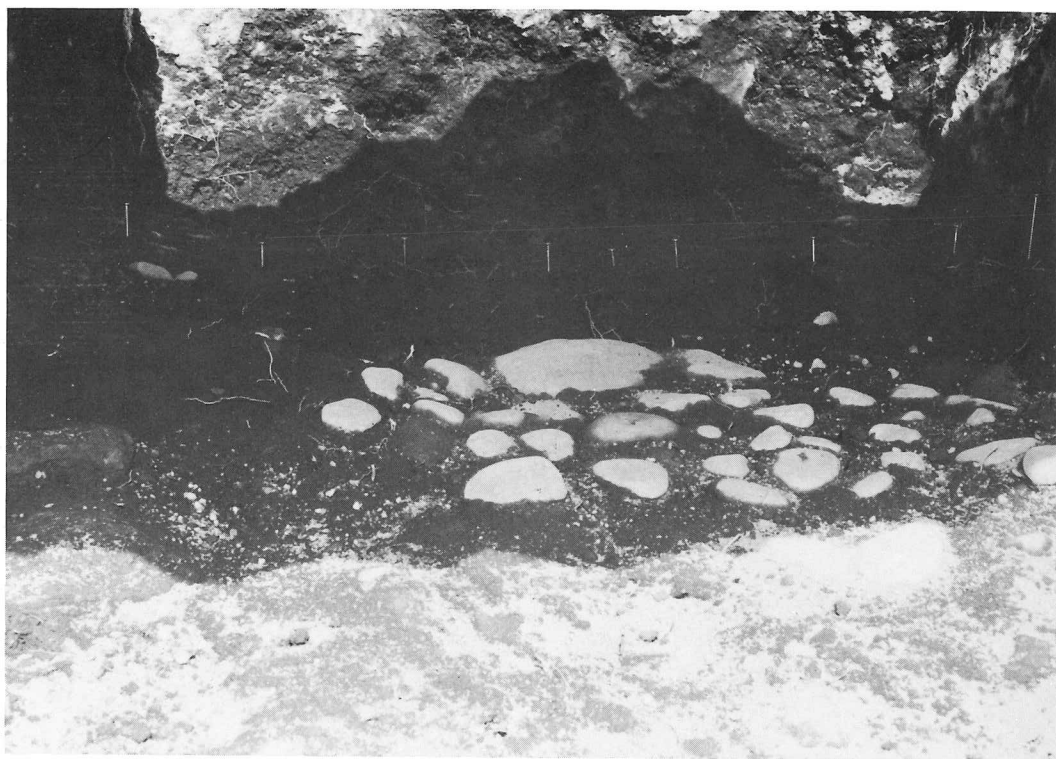
2. 2号古墳石室及び裏込め石（東方より）



3. 2号古墳裏込め石（北方より）



4. 2号古墳墳丘確認トレンチ（東方より）



1. 2号古墳棺床



2. 2号古墳人骨出土状態



3. 2号古墳鉄鎌出土状態



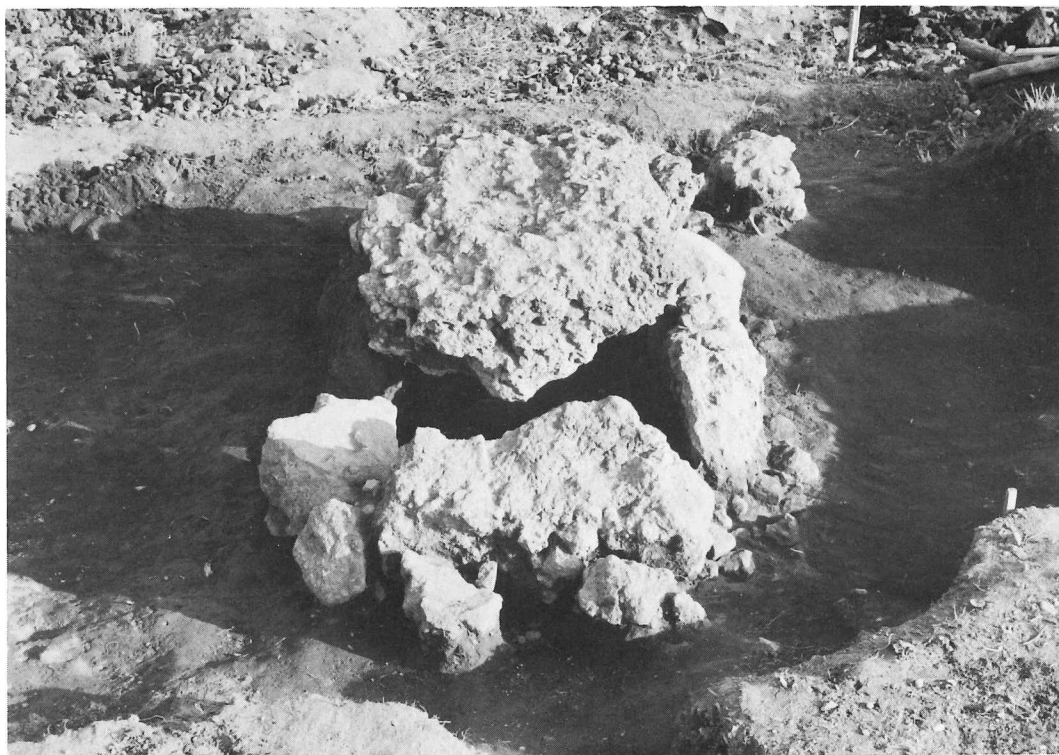
4. 2号古墳羨道部須恵器坏出土状態



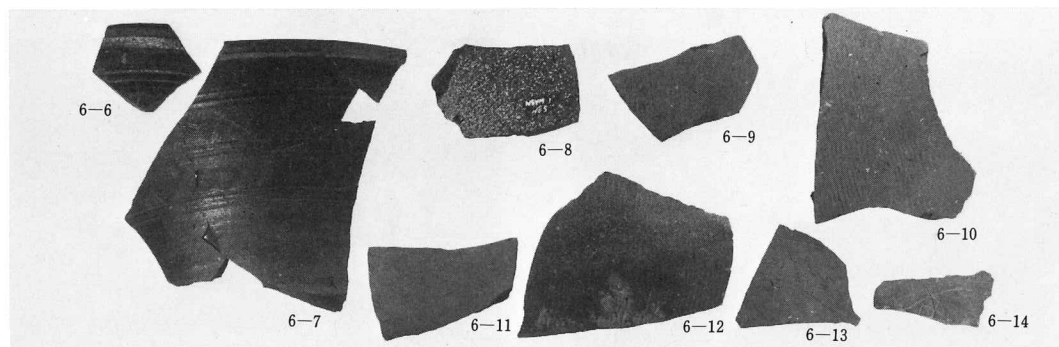
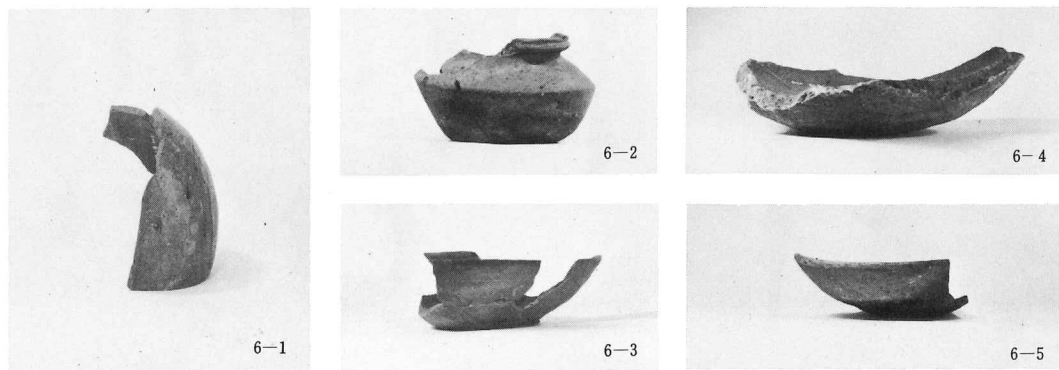
1. 2号古墳石室（東方より）



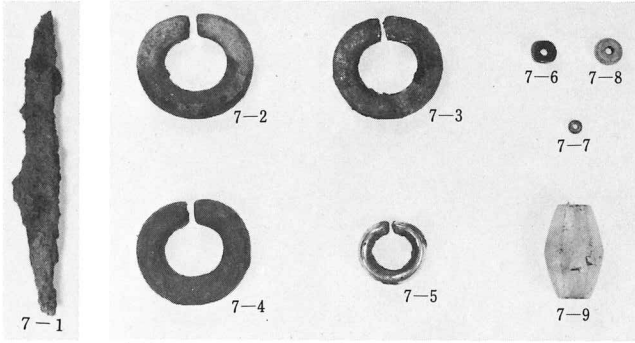
2. 2号古墳石室（北方より）



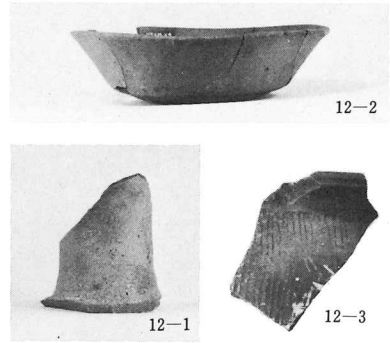
1. 2号古墳石室（西方より）



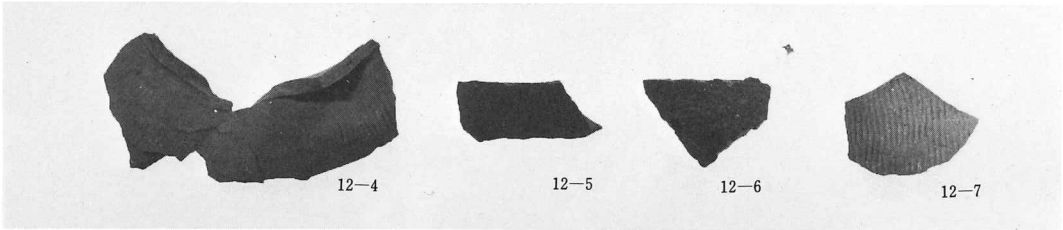
2. 1号古墳出土土器



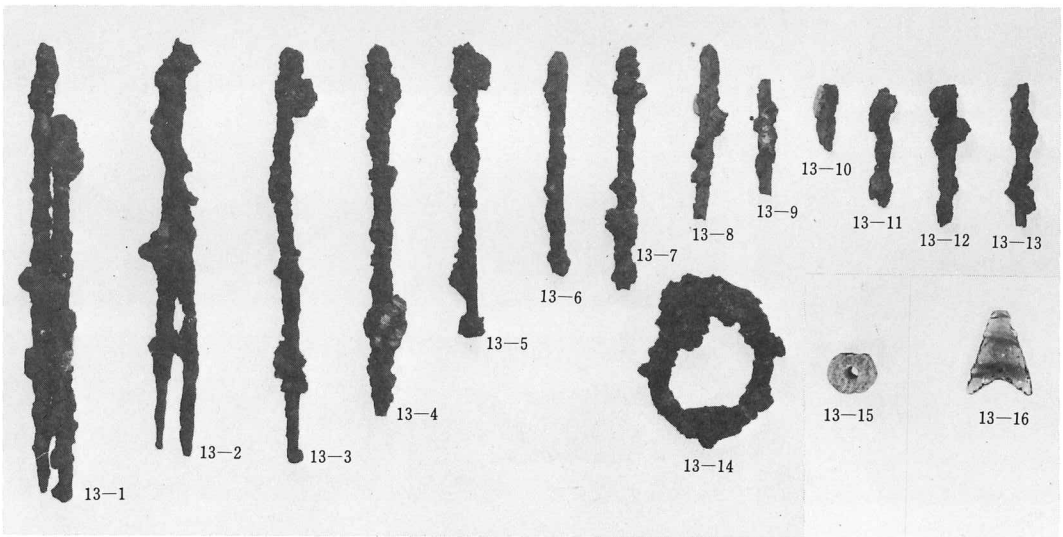
1. 1号古墳出土 刀子・金環及び玉類



2. 2号古墳出土土器



3. 2号古墳出土土器



4. 2号古墳出土鉄製品及び玉類



5. 発掘参加者スナップ写真



5. 発掘参加者スナップ写真



長野県佐久市下大豆塚1号・2号古墳

発掘調査報告書

昭和58年3月発行

編集者 下大豆塚古墳発掘調査団

発行者 佐久市教育委員会

印刷所 株式会社佐久印刷所